

瞬きは他者に影響を与えるのか？

- 印象形成と瞬きのタイミングの観点から -

心理学部心理学科3年 久野 みなと, 古川 南奈, 今 彩理菜, 潮下 響, 津曲 花, 戸塚 夕樹絵,
中村 拓人, 藤井 紗弓, 三浦 梨可子, 水島 佳歩, 吉田 みなみ

(指導教員：金城 光教授)

問題

印象は円滑な人間関係の構築に重要であり、印象形成の判断材料の一つとして瞬目が挙げられる。これまで、不随意に行われる瞬目は、その人の興味、課題の難易度などとの関連が検討されている。しかし、他者の印象形成やコミュニケーションに瞬目が与える影響についてはまだまだ明らかになっていないことが多い。

瞬目の多寡と印象の関連について、高嶋・大森・吉本・伊藤・北村・岸野（2008）は、瞬目が多くなるほどより神経質と評定される傾向があることを示した。また、これまで瞬目の生起タイミングは人々の間で同期することが指摘されてきた。Nakano & Kitazawa（2010）によると、瞬目の同期は“対面して話を聞く”という状況に特異的に生じ、この現象は、瞬目を介して情報のまとまりを無意識に共有する過程を反映していると考察されている。瞬目の模倣は印象と関連があり、前川・乾（2019）は瞬目が無意識のうちに模倣されることで印象が良くなると示している。このことから、他者に好印象を抱いた場合に無意識に瞬目を模倣し、同期の数と印象に関連があると考えられるが、それについてはまだ明らかになっていない。

目的

本研究により不随意に行われる瞬目とコミュニケーションとの関連や他者の印象形成に与える影響について明らかにしたい。

本研究では瞬目以外の要因を少なくした刺激を用いて実験を行う。研究1では、面接場面を想定し、瞬目の多寡による印象評定の変化、認知的負荷と参加者の瞬目数の関連を検討する。瞬目の多寡によって印象に差異が生じ（仮説1）、認知的負荷は参加者の瞬目に影響を及ぼす（仮説2）とした。研究2では、話し手と実験参加者との間で瞬目の同期が生起するか、また瞬目の同期の多寡と話し

手への印象評定および動画内容の理解度との関連を検討する。話し手と聞き手の間で瞬目の同期は起こり（仮説3）、同期の多寡によって印象に差異が生じ（仮説4）、同期が多いほど動画内容の理解度は高くなる（仮説5）とした。

研究1

方法

研究には、33名の大学生（男子16名、女子17名、平均年齢21歳±0.5）が参加した。

参加者は刺激を提示する液晶モニタの正面に着席し、顎台に顔を乗せた。モニタの下部のアイトラッカー（Tobii T60 Eye Tracker）で、実験中の刺激呈示と参加者の瞬目の記録をした。

刺激として、一人の女性面接官が「1.ここまでどのように来ましたか」、「2.何のアルバイトをしていますか」、「3.好きな食べ物は何か、理由も教えてください」、「4.学生と社会人の差は何だと思いますか」という認知的負荷の異なる4つの質問を個別に行う映像4種類を用いた。面接官の瞬目は、高瞬目条件（平均瞬目率36blinks/min）と低瞬目条件（12blinks/min）の2条件を設定した。

参加者は4つの質問内容を事前に呈示され、内容を把握した後、刺激映像の面接官の各質問に各々1分間で答えた。面接終了後、質問紙を配布し、面接官の印象評定と質問ごとの認知的負荷の評定を行った。

印象評定では小孫（2006）が作成した形容詞対を7件法によって評定する尺度を用いた。

結果

高・低瞬目条件において印象評定の質問ごとに t 検定を行った結果、質問9の「慎重な—軽率な」に有意差が ($t(23.087)=2.082, p<.05$)、質問3の「図太い—神経質な」で有意傾向が見られた

($t(24.486)=-1.916, p<.10$)。印象評定値の平均は、質問 9 は高、低瞬目条件でそれぞれ 2.5 と 3.15、質問 3 はそれぞれ 4.25 と 3.31 であった。

質問内容の認知的負荷について分散分析を行った結果、有意差は見られなかった。

考察

瞬目の多い人物には慎重かつ神経質な印象を、少ない人物には軽率かつ凶太い印象を受けるという結果から、仮説 1 は一部支持された。これは、高嶋ら (2008) と同様の傾向を示す結果となった。有意差が見られた質問が少なかった要因としては、実験環境が対話相手への関心を通常よりも低くしたことが考えられる。

また、仮説 2 について、質問内容の認知的負荷には違いがみられなかったのは、参加者にとって質問内容の難易度を意識するというより、回答を作成することに集中してしまったためであると考えられる。

研究 2

方法

参加者、装置、印象評定の質問紙は研究 1 と同じであった。参加者と面識のない男性が面接の心得について話す動画 (2 分 20 秒) を視聴し、話し手に対する印象評定の質問紙と動画内容の確認テストへの回答を求めた。

結果

各参加者の瞬目の開始と終了を全て確認したデータを用いて分析した。

話し手の瞬目と参加者の瞬目の平均との相関分析を行った結果、30 秒($r=.42, p<.001$)、60 秒($r=.34, p<.001$)、90 秒($r=.31, p<.001$)と強い相関がみられたが、120 秒($r=.13, p<.001$)、150 秒($r=-.09, p<.001$)と相関は下がった。また、同期箇所は動画内容の文節や読点、動画の句切れと関連しなかった。

話し手と参加者が同タイミングで瞬目した合計時間が 3.2 秒以上を高群(10 名)、未満を低群(11 名)とし、同期高低群と話し手の印象の各質問による t 検定を行った。その結果、同期と印象には有意差は見られなかった($ps>.05$)。

同期高低群と理解度テストの点数による相関分析を行い、有意差の確認のために無相関分析も行

った。その結果、同期高群と理解度テストの得点に弱い正の相関が見られたが、有意差は見られなかった($r=.17, p>.05$)。

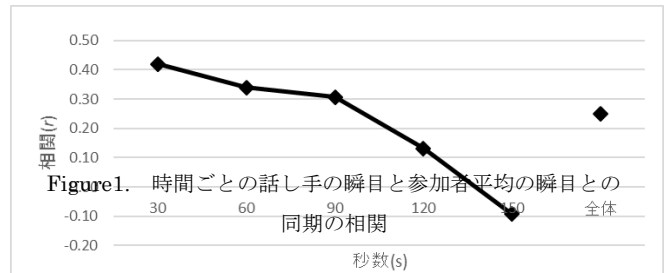


Figure 1. 時間ごとの話し手の瞬目と参加者平均の瞬目との相関

考察

話し手の瞬目と参加者の瞬目の平均との相関は 90 秒以前で認められ、仮説 3 は一部支持された。同期箇所と話の内容の関連はなく、話し手の瞬目が参加者らの瞬目を誘発したと考えられる。

同期の多寡と印象に関連は見られず、仮説 4 は支持されなかった。好印象を抱いた場合に好印象を与えようと他者の瞬目を模倣したのではなく、本研究では他者と瞬目を同期することで無意識にコミュニケーションを図ったと考えられる。

同期の多寡と動画内容の理解度にも関連はなく、仮説 5 は支持されなかった。実験環境が参加者の動画内容への理解を妨げたため、同期の多寡と関連が見られなかったと考えられる。

まとめ

仮説 1 と仮説 3 が一部支持されたという結果から、瞬目は他者に少なからず影響を与えていることが示唆された。

主要引用文献

- 小孫康平 (2006). 瞬目の多少が人の印象形成に及ぼす影響 日本教育工学会論文誌, 30, 1-4.
- 前川 亮・乾 敏郎 (2019). 瞬目の模倣が他者の印象に与える影響 認知心理学研究, 16(2), 15-24.
- Nakano, T., & Kitazawa, S. (2010). Eyeblink entrainment at breakpoints of speech.
- 高嶋和毅・大森慈子・吉本良治・伊藤雄一・北村喜文・岸野文郎 (2008). 人の印象形成におけるキャラクタ瞬目率の影響 情報処理学会論文誌, 49(12), 3811-3820.